＜研究会報告＞

道徳教育を考える

―コールバーグを中心として―

小島　孝*

講演資料

「道徳性の発達に関するコールバーグ理論について」

Ⅰ．道徳性の発達

〔1〕 認知発達論的アプローチ

〔2〕 道徳性の発達段階

① 道徳性発達の6段階について

② 道徳性の段階とは

③ 公正（正義）

Ⅱ．道徳教育

〔1〕 基本的立場

〔2〕 道徳的ディレンマを用いた討論形式による授業

〔3〕 ジャストコミュニティとしての学校

Ⅲ．コールバーグ理論から学ぶもの ― 実践者の立場から

〔1〕 コールバーグ理論について

〔2〕 高校「倫理」にコールバーグ理論をどう生かすか

■小島孝氏の講演資料の項目をもって研究会報告にかえさせていただきます。（編集委員会）

中学生と道徳教育

堀井　登志喜**

道徳教育のむずかしさは，何を教えるかというよりも，どうやって教えるか，という点にあると思う。学習指導要領の「内容」何項目という示し方は，いろいろできるだろうが，かつては，

＊　都立東高等学校

＊＊　筑波大学附属中学校

枚挙的に並べただけという印象が強かった。今次改訂では，基本的性格はあまり変えないで，内容項目の並べ方をやや体系的にグルーピングして示すことになりそうだという。それはそれで結構なことである。

しかし，現場教師は，生徒の心をつかみかねて苦労している向きが多い。どんな項目内容を教えるかという以前に，どうしたら生徒の心に届かせることができるか，に苦労している。

筑波大附中では，今の特設道徳の始まる以前から，独自の取り組みをしてきた伝統をもつ。それは「道徳」と名乗らなくとも，「ライブラリー・アワー」という時間枠の中で，読書を中心とした指導を全教官の協力で運営してきたものである。これは紆余曲折を経て，今は「ホームルーム・アワー」という名称で，特活と道徳を総合したような形で，やはり独自の指導目標・指導計画の下に実施されている。

しかし，最近は生徒の変貌がいちじるしく，旧世代の教師から見れば，ほとんど言葉も通じないような気にさせられることも珍しくない。いわゆる「新人類」という呼称は，巷間軽蔑的ニュアンスで用いられているが，いま少し真剣に両世代の架橋の方策を考えていく必要があるのではないか。

新しい世代の思考方法や価値観が全く新奇なものになってきた背景には，高度経済成長と，ハイテク社会，情報化社会という社会的変化がある。過日発表された教育過程審議会の答申の中の，中学校道徳の改善案の箇所には，「中学生は他者との連帯を求めると同時に主体的な自我の確立を求め，自己の生き方についての関心が高まる」時期だと書いてあるが，最近の中学生をよく観察してみると，これとはおよそ対照的な生徒像が見えてくる。

考えてみれば，明治以来わが国の教育は，個我の完成を目標としてきたし，象徴的な近代化（＝欧化）のための歪みを克服しようと多くの先達が苦闘してきた。戦後の教育基本法でも，教育の目標は「人格の完成」であることに変わりはない。しかし，実際には我々の社会や学校の人間像は，欧米人の主体的自我に迫ることが，今日に至っても一向にできないでいるのではないか。これに加えて，最近の，伝統文化の土壌から完全に切れているかにみえる新人類（それは，ほとんど生得的にメディアと表現体系を我々と異にする）の登場は，道徳教育のみならず，これからの教育がそもそもどのような基盤と方法に立たねばならないかの模索を，我々に強いているのである。